慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	藤澤綾乃君博士学位請求論文審査報告
Sub Title	
Author	
Publisher	三田史学会
Publication year	2022
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.91, No.3 (2022. 10) ,p.61 (235)- 69 (243)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20221000-0061

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

る。

論文審査担当者

主査　慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員　杉本　智俊

副査　慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員　安藤　広道

副査　金沢大学人文学類教授・資料館館長　足立　拓朗

藤澤綾乃君博士学位請求論文審査報告

論文題目

「教会堂及び修道院建築の変遷から見た
初期ビザンツ期ユダヤ・サマリア地方のキリスト教化」

論文の概要

藤澤綾乃君の博士学位請求論文は、初期ビザンツ期のパレスチナにおけるキリスト教化の経緯とその在り方を教会堂及び修道院の建設状況の変遷から探り出すことを目的としており、とりわけエルサレムを含むユダヤ・サマリア地方に焦点をあてている。従来パレスチナにおけるキリスト教化については、四世紀前半のコンスタンティヌス帝によるキリスト教公認とともに教会堂建設が盛んになり、巡礼者の往来も活発になったとする説が一般的であった。ところが近年、キリスト教が広く受け入れられたのは早くとも五世紀後半からであり、それ以前は都市部に限定された宗教であったという見解が一部の研究者たちから主張されるようになっている。この見解は近年の考古学的調査の成果に基づくものとされ、ユダヤ・サマリア地方はネゲブ地方やガリラヤ地方と比べてキリスト教化が遅かったと主張されている。

こうした見解の違いが生じる大きな理由は、考古学的調査による各遺構の年代決定が曖昧なことである。古い報告書の多く

は教会堂や修道院遺構を幅広く「ビザンツ期」とだけ年代づけていることが多く、実際には四世紀から七世紀にまたがる当該地域のビザンツ期のどの時点で建造されたのかはあきらかでない。また、より詳細に年代づけられる場合でも、従来の研究では創建年代、利用年代、廃絶年代を区別して年代決定をしていない場合が少なくない。教会堂は一般に数百年にわたって使用される建築であり、仮に七世紀の建物とされても、それは教会堂の創建年代が七世紀であることを意味しない。あくまで廃絶年代や利用された一時点の年代を示しているにすぎない可能性もあるからである。そこで本論は、当該地方の教会堂及び修道院遺構を集成した上で、それらの創建年代をすべて一定の基準で再検証し、時期ごとの教会堂建設の傾向をあきらかにしている。また、それに基づき初期ビザンツ期のパレスチナにおけるキリスト教化を再評価するものとなっている。

論文の構成

第Ⅰ部　序論
第1章　歴史的背景
1節　ローマ帝国社会におけるキリスト教
2節　パレスチナ社会とキリスト教
3節　キリスト教公認後のパレスチナ
第2章　先行研究と本研究の課題
1節　パレスチナにおけるキリスト教考古学の変遷
1項　踏査
2項　踏査・発掘調査と集成
3項　一般的な解釈
4項　従来説に対する批判的解釈
5項　小括
2節　遺構の年代決定について
1項　文献学に基づく年代決定
2項　銘文学に基づく年代決定
3項　図像学に基づく年代決定
4項　出土遺物に基づく年代決定
5項　建築構造に基づく年代決定
3節　先行研究の問題点と本研究の課題
第Ⅱ部　発掘調査が行なわれた教会堂遺構
第3章　教会堂建築についての概要
1節　バシリカ式教会堂
1項　単廊式教会堂
2項　集中式教会堂
3項　年代決定に関する基準の設定
2節　分類A：創建ないし再建・改修年代を推定できる遺構
3節　バシリカ式教会堂
1項　分類A1
2項　分類A2

3　分類A3
2項　単廊式教会堂
3項　集中式教会堂
4項　型式不明
4節　分類B：創建ないし再建・改修年代が明確ではない遺構
1項　バシリカ式教会堂
2項　単廊式教会堂
3項　集中式教会堂
4項　型式不明
5節　考察
第4章　教会堂建築における平面規模の時期変遷
1節　バシリカ式教会堂における平面規模の変遷
1項　四世紀に創建が確認されたバシリカ式教会堂
2項　五世紀に創建ないし再建・改修が確認されたバシリカ式教会堂
3項　六世紀に創建ないし再建・改修が確認されたバシリカ式教会堂
4項　七世紀以降に創建ないし改修が確認されたバシリカ式教会堂
2節　単廊式における平面規模の変遷
3節　集中式教会堂における平面規模の変遷
4節　考察
第5章　教会堂建築における内部構造の時期変遷
1節　バシリカ式教会堂におけるアプス及び内陣の建築構造の変遷
1項　アプスの数
2項　アプス両側の構造
3項　内陣の構造
4項　分析結果の小括
2節　集中式におけるアプス及び内陣の建築構造の変遷
1項　アプスの数
2項　アプス両側の構造
3項　内陣の構造
4項　分析結果の小括
3節　バシリカ式における副次的な建築構造の変遷
1項　ナルテックス及びアトリウム
2項　小礼拝堂の付設
4節　集中式における副次的な建築構造の変遷
1項　ナルテックス及びアトリウム
5節　考察
第Ⅲ部
第6章　発掘調査が行なわれた修道院遺構
1節　修道院建築についての概要
1項　共住式修道院（コエノビウム）
2項　独住式修道院（ラウラ）
2節　年代決定に関する基準の設定
3節　分類A：創建ないし再建・改修年代を推定できる

遺構
4節　分類B：創建ないし再建・改修年代が明確ではない遺構
5節　考察
第7章　修道院建築における平面規模の時期変遷
1節　型式と平面規模の変遷
1項　五世紀に創建ないし改修が確認された修道院
2項　六世紀に創建ないし改修が確認された修道院
3項　七世紀以降に再建が確認された修道院
2節　考察
第Ⅳ部
第8章　教会堂及び修道院建築の分布に関する時期変遷
1節　各時期における遺構の広がり方について
1項　四世紀に年代づけられる遺構
2項　五世紀に年代づけられる遺構
3項　六世紀に年代づけられる遺構
4項　七世紀以降に年代づけられる遺構
2節　小括
1項　都市・幹線道路（巡礼路）との関わり
2項　聖書言及との関わり
3項　地理的環境との関わり
第9章　総合的考察及び結論
謝辞
参照文献

また、この他に別冊として一二五基の教会堂遺構と六八基の修道院遺構の基礎資料と図版がカタログとして添付されている。

各章の要約

序章では、上述の研究目的と問題の所在に加え、対象地域や用語の説明などの前提条件が記されている。また、対象地域をユダヤ・サマリア地方とする理由として（1）聖書の言及と密接に関わりがある地域であること、（2）村落遺跡が多く、キリスト教が土着の宗教としてどの程度根づいていたのかを検討する際に適した地域であること、（3）地形の起伏が多く、低地と高地の双方に建てられた遺構について議論することが可能であること、（4）当該地方の大半は現パレスチナ自治区に位置し、キリスト教化に関する議論の余地が残されている地域であることの四つを提示している。

第1章では、ローマ帝国におけるキリスト教の在り方とパレスチナのキリスト教化について、その歴史的背景を概観している。本章は、主として既存の研究の成果に基づいて前提となる情報を整理するものとなっている。

第2章では、先行研究を概観した上で本研究の課題を提示している。上述のように、パレスチナのキリスト教化に関する学説は二極化しているが、それは遺構の年代決定が曖昧なまま進められてきたことが問題の根底にあると指摘している。また、従来の研究では遺構の年代決定法の軽重について考察されていないことも問題点として指摘している。これらを踏まえ、本章

では各遺構の年代決定に用いうる指標として文献史料との関連性、銘文資料のスタイル、アプスなど建築構造の時期的変遷、モザイク床などの美術様式、ランプやコインなどの出土遺物を取り上げ、それぞれどのように活用でき、どのような課題をはらんでいるのかを示している。

第3章では、発掘調査が行なわれた教会堂遺構一二五基について、それぞれの調査概要と先行研究による年代決定を踏まえつつ、2章で示された五つの指標から創建年代の再検証を行なっている。発掘調査が行なわれた遺構については、創建ないし再建・改修年代をあきらかにできるか否かについてA及びBの大分類を設定し、その判断基準とされる指標毎に1から3の小分類、すなわち、1文献史料と考古資料によって年代を推定できる遺構、2銘文資料と考古資料によって年代を推定できる遺構、3考古資料のみによって年代を推定できる遺構の三つの分類基準を設けている。本章こそが本論の中核にあたる部分であり、遺構ごとに推定しうる創建年代の幅を提示し、そこから時期毎に創建された教会堂の数と性格をあきらかにしている。

第4章では、さらに教会堂を型式毎に分類し、平面規模の時期的変遷を確認している。ユダヤ・サマリア地方におけるビザンツ期教会堂の建築型式は、四世紀から七世紀の間一貫して三廊式バシリカが主流であり、特に五世紀以降の教会堂は八割程度がそうであるという高い割合が示されている。また、三廊式バシリカは徐々に小規模化していく傾向が指摘されている。一部規模が拡大した事例もあるが、それらは元々存在した教会堂に新たな構造を追加する改修作業によることも示されている。この結果、ユダヤ・サマリア地方の六世紀には再建あるいは改修された教会堂が最も多く、新たに創建された教会堂はそれほど多くないことがあきらかになった。

第5章では、教会堂建築における内部構造の時期的変遷を確認している。とりわけ、教会堂東側のアプスとその周辺の構造は遺構によって異なっていることから、アプスの数、アプス両側の構造、内陣の構造について型式・年代毎に分析している。また、ナルテックスやアトリウム、小礼拝堂などの副次的な建築構造の変遷についても検討している。

第6章では、発掘調査が行なわれた修道院遺構六八基を対象とし、年代決定の根拠について再検討している。方法は第3章と同様である。一般に古代地中海地域の修道院建築には、共住式修道院（コエノビウム）と独住式修道院（ラウラ）の二つの型式が挙げられる。しかし、本論で確認された建築型式は、いずれの時期においても全て共住式修道院であった。

第7章では、修道院の平面規模の時期的変遷を確認している。教会堂が四世紀から確認されていたのに対し、共住式修道院が確認されるようになるのは五世紀以降になってからであった。このことから、修道士の集団生活は五世紀以降に発展したとされ、六世紀にも確実に増加し、七世紀にはすでに出現が落ち着いていたと評価している。

第8章では、以上のデータを総合して、教会堂及び修道院建設の空間的な広がりを時期ごとに分析している。具体的には

（1）都市・幹線道路（巡礼路）との関わり、（2）聖書言及との関わり、（3）地理的環境との関わりについて検討している。（1）については、都市や幹線道路沿い以外にも六世紀以前から教会堂及び修道院が存在していたことをあきらかにしている。（2）については、聖書の伝承と関連づけられる教会堂及び修道院はビザンツ期全体を見渡してみるとそれほど多くないことをあきらかにしている。（3）については、教会堂はユダヤ・サマリア地方の中でも比較的標高が高い山地や都市近郊に多く分布していたが、修道院はユダの荒野と呼ばれる砂漠地域にも点在していたことを指摘している。これらの修道院の存在は、ユダヤ・サマリア地方のキリスト教化が都市部に限られたものではなかったことを意味するとしている。また、従来の考古学的調査では初期ビザンツ期の住居趾について十分な調査が行われていないが、これだけ多くの教会堂や修道院遺構が確認されることは、ユダヤ・サマリア地方全域でキリスト教信仰が広がっていたことの表れであるとしている。

第9章は、これまでの分析をまとめ、総合的な考察及び結論を提示している。まず、建築規模と立地については、大規模に創建される事例は国家事業などわずかなものに限定されることを指摘している。また、時期を経る毎に教会堂は改修に留まる傾向があり、新たに創建される場合は小規模なものである傾向を確認している。教会堂の建築型式については、1アプス型式が四世紀から七世紀にかけて一定数存在したのに対し、3アプス型式は六世紀（早くとも五世紀後半）まで出現を待たねばならないことが示されている。時空間的な分布については、キリスト教公認直後は主に大型の教会堂が主要都市や幹線道路沿いに建設されたが、都市郊外にもわずかながら建設されていたことが確認されている。五世紀には、さらに中小規模の教会堂が数多く建造され、修道院の出現も考古学的に認められるようになった。六世紀に入ると、教会堂、修道院のどちらもが都市や幹線道路と関係なく、ユダヤ・サマリア地方全土に建てられていることがあきらかになった。

以上の分析から本論は、ユダヤ・サマリア地方においてキリスト教信仰は都市部に限定された宗教ではなく、小さな町や村落でもある程度受け入れられていたと結論づけている。また、五世紀に入る頃には概ねキリスト教信仰が広く浸透しており、教会堂建設がすでに難しくない社会状況にあったとしている。その結果、共住式修道院も各地に定着した。六世紀になると教会堂の数はピークに達するが、それらは新設よりも改修に留められたものが圧倒的に多く、建設に対する熱意はすでに落ち着いていたと評価している。

審査要旨

藤澤綾乃君の博士号請求論文は、初期ビザンツ期におけるパレスチナのキリスト教化を教会堂及び修道院建設の広がりからとらえるという非常に視野の広い研究である。パレスチナのキリスト教化は四世紀から始まっていたのか、それとも、より後代に始まったのかという点が近年議論されているが、藤澤君は

入手可能なすべての資料を提示し、その建設プロセスを検証することで、これらの学説に対して説得力のある評価を下している。その学術的意義は、大きく以下の五つの点にまとめることができる。

第一の点は、異なる学説が議論される背景にある問題を的確に指摘し、その解決に至る方法論を提示・遂行したことである。すなわち、根拠となるキリスト教関連遺構の年代決定が曖昧であり、一部の遺構の年代を全体化して議論する傾向があることを示し、すべての遺構の創建年代を再検証したことである。藤澤君はこの目的のために一二五基の教会堂遺構、六八基の修道院遺構を集成し、文献史料との関連性、銘文資料、建築構造の変遷、モザイク床など美術様式の変遷、土器、コインなどの遺物といった五つの年代決定の指標を一定の基準で評価し直し、各遺構の創建年代を可能な限り正確に与えるという作業を行った。これまでビザンツ期の教会堂遺構は、しばしば非常に幅広く「ビザンツ期」と年代づけられたり、創建年代と利用年代、廃絶年代を区別しないまま議論されることが多かったが、それでは四世紀から七世紀にいたるパレスチナのビザンツ期のどの時点でキリスト教関連遺構が建造されたのが確認できなかったためである。本論には別冊としてこれらすべての遺構の情報がカタログとして添付されているが、これは膨大な作業の結果であり、このデータそのものが大きな価値を持つものであろう。

第二の点は、こうしたデータから、ビザンツ期の四、五、六、七世紀それぞれの教会堂及び修道院建設の傾向を具体的に示したことである。それによると、四世紀の時点では大型の教会堂が聖書と関わりのある都市に造られる傾向があるが、同時に中小規模の教会堂の建設もすでに見られることが指摘されている。五世紀には新たに建造される教会堂の数がピークを迎え、共住式修道院の建設も始まったことが示されている。六世紀になると、教会堂の数は最大となるが、その多くはすでに存在していたものであり、主として改築が行われたことが示されている。また、新築される場合は中小規模のものが多いことも指摘されている。七世紀に新たに造られた教会堂や修道院遺構は非常に少ない。

第三の意義は、このように再検証された証拠から、パレスチナのキリスト教化はビザンツ期のかなり早い時期から始まっていたことを示したことである。それは結果的に伝統的な見解を支持することとなるが、単に過去の説の焼き直しではなく、より信頼性の高い証拠に基づく議論を提示したこととなる。一方、藤澤君自身はその用語を用いていないが、キリスト教はむしろビザンツ期の末からイスラム期に発展したという「歴史修正主義的」見解は証拠によって支持されないことを示した意義も大きい。

第四に、本論では年代決定の根拠を確認する中で、ビザンツ期の教会堂建築の構造上の変遷についてもいくつかの指摘を行っており、今後の教会堂遺構研究における指針となりえる。具体的には、初期のバシリカ建築は基本的に1アプス型式であり3アプス型式は六世紀以降に登場したことを示している。この

ことはこれまでネゲブ地域などで指摘されていたが、本論はそのことをユダヤ・サマリア地域でも追認し、そこでは1アプス型式の伝統がより強かったことを示している。同様に、副次的礼拝堂の設置についてもその始まりが遅かったことを示している。またモザイク床の装飾は、初期ビザンツ期では主として単純な幾何学模様なのに対して後期になると動物など具象的な模様が増加することも指摘している。

最後に、本論は文献史料、銘文資料、考古資料を十全に用いた研究としてビザンツ期研究の分野横断的な可能性を広げたものとして評価される。本来歴史考古学はそのようなものであるべきであるが、それぞれの専門性もあり、実際にこのように広がりを持った研究を行うことは容易ではない。本論はそれに果敢に挑んだ研究として評価されるべきであろう。また、ビザンツ期の教会堂建築研究の多くはローマ自体やアナトリア、ジョージアなどが中心となっており、キリスト教発生の地であるパレスチナに関する研究は十分に行われてこなかった。その点でも、本研究は初期ビザンツ期研究に新たな可能性を示すものとなったと言えよう。

一方、本論においても、個々の議論には粗雑な箇所が散見されることは否定できない。文献史料における言及と遺跡の同定が十分議論されないまま前提とされてしまっている例や銘文資料の解釈が特定の研究者の成果に寄りすぎ、批判的に検証されないまま採用されている例がある。土器やランプの年代決定についても、本論の定義以上に細かな議論がなされている箇所がある。「イコノクラスム」という用語は文字通り「聖像破壊」の意味で用いられているが、それは八～九世紀の東ローマ帝国内の聖像破壊運動を指す一般的用法とは異なっており、何らかの説明が必要であろう。地名・人名に関してもラテン語表記と現代語表記が混在している箇所や若干の誤記が認められる。

再検証した年代についても、四～五世紀のように世紀をまたぐ場合、本論の総括的議論は早いほうの年代に基づいて行われている。しかし、藤澤君はビザンツ期の教会堂建設は早い時期から始まっていたという結論であるので、むしろ自説に不利な可能性、つまり遅いほうの年代を採用して議論したとしても本論と同様の結論となることを示したほうが説得力を増したであろう。

このように本論にはいくつか改善点が残されているが、これらはパレスチナにおけるビザンツ期の教会堂及び修道院遺構を俯瞰的に再検証した上で当該地域のキリスト教化を論じた本論の価値を損なうものではない。本論が当該地域のキリスト教化研究により確実な基礎をもたらしたことはあきらかであり、藤澤君の研究者としてのさらなる発展を期待させるものとなっている。以上のことから、審査員一同は、藤澤綾乃君の本博士号請求論文を学位授与にふさわしいものと判断する。

論文審査担当者

主査　慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員　杉本　智俊

副査　慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員　渡辺　丈彦
副査　慶應義塾大学文学部准教授　長谷川　敬
副査　奈良大学文学部史学科教授　足立　広明
学識確認　慶應義塾大学文学部教授・文学研究科委員　杉本　智俊

二〇二一年度修士論文要旨

〔日本史学専攻〕

日中戦争期における知識人たちの活動と問題意識
―昭和研究会を例に―

木島　詩織

本論文は、日中戦争勃発から太平洋戦争突入までの時期の知識人たちがどのような活動をし、何を問題として研究をしていたかを明らかにするものである。中でも当時の知識人たちが集まって研究・議論をしていたとされ、近衛文麿との関連でも知られる昭和研究会を対象とし、この研究会内で知識人たちが何を考えて活動していたかを検討した。

第一章では、昭和研究会に関する概要をまとめた。昭和研究会とは、昭和10年に発足した政策検討・立案を目的とする研究会である。会を起ち上げた中心人物である後藤隆之助が近衛文麿と親交があったことから、近衛のブレーン集団であると目されていた。創設時に研究会が掲げた目標は、事務局員であった酒井三郎や後藤隆之助の回想によると「憲法の範囲内での改革」「既成政党排撃」「ファッショ反対」であったとされ、官僚や学者、ジャーナリストなど様々な人物が会議に参加していた。